

自閉症の子どもの姿のとらえかた
～幼稚園での参与観察から見てきたもの～

要約： 本研究は2人の自閉症児に対する幼稚園での9か月間の参与観察をもとに、実践に活かす研究をめざして取り組んだものである。参与観察で得たエピソードの解釈と考察をふまえ、①特別支援学校とは違う幼稚園というフレームのなかで子どもを見ること、②子どもの世界とそこでの大人の役割、③自閉症像から見た行動と対応の方法論ではなく子どもにとっての状況や行動の意味、④子どもを見る時の大人自身のバイアス、の4点から総合考察を行った。

キーワード： 特別支援教育、自閉症、参与観察、幼稚園、

I はじめに

1 研究の動機

研究にあたって、次の2つの点がまず私の頭にあった。1つ目は「この研究を実践の場に活かすことのできる研究にしていこう」ということ。2つ目は「幼稚園での参与観察から障害のある子ども達への支援の糸口を探っていこう」ということであった。これらのことは、研究にとりかかった時に明確な方向性や方法論が定まっていたわけではなかった。そのためこの2つの点に関し、明確にしておくこと自体が、本研究の中身として大きなウエイトを占めることになった。

2 研究の目的

本研究では自閉症児／者への支援の糸口に近づくため、自閉症児を含めた子どもの世界のなかでどのようなことが起こっているかを参与観察を通して知る。そのなかでもとりわけ自閉症児の側からみた意味とかかわっている者(大人やまわりの子)の意味の交わり(重なりやズレ)がどのような過程で生じていたかを明らかにしていきたい。このことをふまえ、どのようなことが実践の場に活かすことにつながるかを総合考察していく。

II 研究の方法

本研究は、20XX年6月から20XX+1年3月の9か月間、幼稚園(未満児、年少児、年中児、年長児クラス各1学級、園児総数109名、教諭9名、園長1名、運転手1名)に在籍するX(年中児)とY(年長児)の幼稚園での生活の参与観察を行い、観察されたエピソードの解釈をもとに考察を行った。最後にこれらのエピソードと考察をふまえ総合考察を行った。

1 対象児

X(年中児)：観察開始時4歳5か月 療育手帳B 週に

1日療育機関へ通う 観察開始時に診断はついていなかったが母親は「自閉症」と言う 年中児クラス(園児31名、教諭2名)に在籍

Y(年長児)：観察開始時6歳2か月 医療機関より「アスペルガー障害の疑い」との診断をうける 年長児クラス(園児32名、教諭2名)に在籍

2 観察方法

6月から3月までの9か月間にA幼稚園にて計45回参与観察を行った。6月から7月にかけては週1日、1回の観察は1時間半程度。9月からはできる限りA幼稚園での観察を行うようにし、観察する時間は8時45分から対象児が降園するまで観察するようにした。1回の参与観察ではひとりの対象児を観察し、次の回はもうひとりの対象児を観察するようにした。また、9月から3月の参与観察期間では、担任の先生や園長とその日の参与観察で観察された対象児のことについて話し合う時間をもつようにした。この参与観察に並行して、それぞれの対象児についてIN REALの手法をもとにビデオ分析を2回ずつ行い、幼稚園の先生と対象児の言動について検討する機会をもった。

3 分析資料

参与観察では、観察された出来事その場でメモに書き取った。また、可能な場合はビデオカメラによる録画記録も併せて行った。そのメモやビデオ記録をもとに、参与観察した日から時間をおかずA幼稚園での出来事をエピソードとしてフィールドノートに記入した。そこには、観察を通して私の感じた思いや仮説や疑問についても記載した。このフィールドノートに併せて、参与観察後に行ったA幼稚園の先生方との話し合いについてICレコーダーで録音し、録音記録をもとに話し合いの要点を整理して考

察を行う際に利用した。フィールドノートに記載したエピソードから、Xに関するエピソードを6事例、Yに関するエピソードを7事例選び分析資料とした。

Ⅲ エピソードと考察

1 子どもの世界で起こるコンフリクト

《Y4、Y5、Y6、X2、X5から》

けんかやいじめのように見えたエピソードをまとめる段階で私のはじめに焦点をあてていたことは、「子ども同士のコンフリクトがどのようにして終息に向かっていったか」ということだった。子ども同士のコンフリクトは、「大人が間に入って終息させなくても、子ども達だけの力によって終息にもっていくことができる」という私にとっての発見がその時あった。しかし、そこにはコンフリクトが終息していくことに対する私のこだわりがあった。

これらのエピソードをもう一度振り返って思うことは、コンフリクトを終息させることにこだわった私の意識の深いところに、私自身の不安があったということである。それは子どもをうまくコントロールできない不安、「うまくかかわることのできない教師」と思われる不安、「うまく解決」していないかもしれない不安であった。これらのエピソードのなかにはコンフリクトの場面から目をそらしては見えなかった現実があり、それはコンフリクトの終息の方略だけを探っていたのでは気づけなかった、子どもにとってコンフリクトが起きたことに由来する意味であったと思う。

2 大人の言動が子どもに与える確証

《Y2、Y3、Y7から》

それぞれのエピソードをつないでいった今考えていることは、YがRTやまわりの大人とやりとりするなかでの言動が、Yが確証を得ることにつながっていたということである。それは、確証を得る目的でYが大人とやりとりのか、やりとりの結果としてYが確証を得ることになるのかはわからない。しかし、これらのエピソードでYが確証を得るということには、幼稚園での生活をしていくなかでのあいまいなものに、Yがやりとりを通して明確な根拠づけをしていたということが考えられる。

私やVTが感じた《Y7》でのYの言動に対しての違和感はどこから来たのか？そもそも日常の生活のなかで確証というものが常に明確な形で必要だろうかと思う。相手から了解されないかもしれないと考えた時にはじめて、確証を得るための準備をするということは確かにある。しかし、日常のなかでは確証がなくても済むことが多いのではない。相手からの明確な形で確証を示すものがなくて

も、たぶん相手はOKを出すだろうという予測のもとで行っていることが多いのではないと思う。私やVTが感じた違和感は、日常で多くのことを明確にせずにごろごろと過ごすのできる者が、明確にしたことをあえて示された場面を感じたことではなかったかと思う。このことは、あいまいであるがゆえに不安を感じながら毎日の生活を送っているかもしれないYが、手もちの力を使い、なんとか日々の生活をやりすごそうとしている姿のあらわれではないかと思う。

3 子どもの学び

《Y1、X1、X3、X4、X6から》

《Y1》のエピソードで場面や状況に結びつけたことばとして言った「あつ」のYにとっての意味は、『ウォーリーの絵本』を自分も見たいということである。この時、Cは同じ意味をもった言動として「ウォーリー見せて」と言い、『ウォーリーの絵本』を見る仲間に加わった。そして、Yも同じように「おれも見せて」と言って仲間に加わる。ここには場面や状況に結びついたことばを使うだけでなく、状況に合わせて対応を変化させたYの姿があったと考えた。

《X1、X3、X4、X6》のエピソードをつないでいくなかで、私が作りあげたストーリーは、Xにとっての幼稚園の生活とは多くの子ども達がいる幼稚園という場に入り、そこで何が起きるのか、人や物事がどのように動いていくのか、そしてX自身もどうすればその状況を動かすことができるのかを、日々の生活の中から一つひとつ見つけ、そして確かめてきたというストーリーである。これがXにとっての幼稚園での「学び」であった。また、周りの子にとってもXがどのように動き、どのようにかかわっていくことができるかを確かめてきたというXと相互の「学び」があった。幼稚園という場でともに生活し、ともに社会をつくり、その中で「学び」が起きたのである。Xや周りの子が生活している幼稚園という社会のなかで、子ども達が手がかりを探し、その手がかりを使っていかに生活していくかを見つけていった事実を、これらのエピソードから見出すことができたと思っていた。

しかし、今考えると参与観察時に私が見逃していた出来事もあったのではないかと思う。日常の観察では意識する／しないにかかわらず、何らかの視点をもって生活の流れのなかからあるエピソードを切り取っているはずである。そうであるなら、私がこれら《X1、X3、X4、X6》のエピソードを生活のなかから取り出した時にはすでに、私のなかに「Xとまわりの子のかかわりの形が変化していく」というストーリーがあり、自分では自覚していなかっ

たこのストーリーに沿って私は参与観察を続けエピソードを集めていたのかもしれない。そこには、あらかじめ考えているストーリーに基づいてエピソードを集め、そこに現実を見出したかのようにストーリーを組み立ててしまう危うさがあるのではないかと思った。

IV 総合考察

1 幼稚園で参与観察したことの私にとっての意味

① 特別支援学校とは違う、幼稚園というフレームのなかで子どもを見る

参与観察のなかでは私はいつも「自分ならこの場面でどうかかわるか」ということを考えていた。そこでは、どのような手だてをとればよいか、どのように声かけしていけばよいかを、観察したそれぞれの場面で考えていた。そして、当時の私は幼稚園生活での子どもの行動のなかから、私が情報や知識としてもっていた自閉症の行動特徴とされるものを見つけ出そうとしていた。私は情報や知識によって私のなかで自閉症像をつくり、観察されたXやYの行動が私の考えた自閉症像と合致するものであるなら、自閉症ということからの支援を考える糸口を見つめることができると思っていたからである。

また、特別支援学校において私は教師として子ども達とかわり、そこでは子ども達を「支援する者」としての思いを私は強くもっていた。幼稚園での参与観察でも、この「支援する者」としての意識が頭をもたげてきたのだと思う。私にとって「支援する者」という意識は、子どもの活動に大人が介入していくことにつながっていた。しかし、私は観察する立場にいた。緊張感・緊迫感をもちながらも子ども達を見守り続けなければならなかった。

子ども達の活動を見守り続けるなかで、Yのかかわる相手の広がりやY自身の学び、Xとまわりの子とのかかわりのなかで咬まずにコンフリクトを回避する現実など、大人が介入しなくても済む場面を観察することができた。私は「大人が介入しなくてもよいのかもしれない」ということを少しずつ考えるようになっていった。その後、幼稚園の先生との話し合いのなかで出た「あえて介入しなかった」「子ども同士で何とかなるだろう」という先生のことばは、私とのかかわり方の違いを気づかせるものであり、私は大人が介入しなくてもよいとの思いをさらに膨らませることになった。

「大人が介入しなくてもよいのではないか」と考えるようになったことや、「どのようにかわるか」ということをいったん横に置くようにしたこと、私は観察者の立場として子ども達から目を離さず見続けなければならないという思いが私のなかではっきりとしてきた。そして、子

どもにどのようなことが起こるのかを観察していこうと考えるようになった。研究当初は観察のなかで自閉症の行動とされるものをXやYの言動から見つけるといった、子どもの行動の表面に見えるものを追っていたのに対し、ここでは子どもの行動のなかにある子どもにとっての意味を見出そうとするようになった。

このような観察する際の視点について、特別支援学校での実践でも気づくことができないわけではなかったと思う。しかし、これまでの私は子ども達を前にした時に「支援する者」そして「子どもの活動に介入していく者」としての意識を強くもっていた。介入することにより子ども達が事態の終息に向かおうとする契機を見逃していたり、私自身がつくりあげた自閉症像からの支援を考えることから抜け出せなかったりしていたのかもしれない。

②子どもの世界とそこでの大人の役割

子どもの世界では大人が考える方略ではなくても、子どもの世界で使えるやり方で子ども達は事態に向き合っており、大人があえて介入しなくてもよいことがある。しかし、自閉症児の言動に対して大人には違和感が生じる。これを大人側に引き寄せて解釈するだけでは、そこから子どもが何をしたかったのかは見えてこない。子どもにはそのような言動をせざるを得ない何らかの理由があり、何か理由があるのではないかということを含めて子どもの行動を見守り、何をしようとしていたのかという子どもにとっての行動の意味を考えることが、大人に求められることではないかと思う。それは子ども達の間で介入することではない。しかし、子どもを見守っているなかでは、そこで起きた出来事がトラブルに発展する可能性もある。そうなった場合でもその出来事をすべて引き受ける覚悟が、子どもに対しての責任を負う大人の役割であり支援ではないかと思う。

2 実践の場に活かす

①自閉症像から見た行動の解釈と対応の方法論ではなく、子どもにとっての状況や行動の意味

参与観察を始めた頃の私は、自閉症という障害像から子どものことを理解しようとしていた。どうして私が自閉症の行動特徴とされているものからつくりあげた自閉症像をもとに子どもを理解しようとしたのかを考えてみると、自閉症の子どもの状況の捉え方や行動の意味が私にとってわかりにくかったからである。そこで、私は子どもの行動のなかから自閉症の行動特徴とされるものと結びつくものを見つけようとした。自閉症の行動特徴とされているものには、行動が生起する原因や理由が説明されているも

のがある。私は観察のなかで自閉症の行動特徴とされるものを見つけ、自閉症の行動特徴が見られた時の原因や理由といったものを、その時の子どものなかで起きたであろうこととした。そして、原因や理由をつかむことができたと思うことで、観察した一連の行動と子どものことについて理解できたつもりでいた。そして、私はその理解をもとに子どもの行動に対しての手だてや支援方法を考えようとしていた。そこには、観察されたその子の置かれた状況のなかでの現実と、自閉症像にもとづく原因や理由によって起こるとされることとの間に隙間があることに私は気がついていなかった。

さまざまな要因や文脈のなかで子ども達は生活している。それゆえ実践の場で子ども達とかがかわる時には、その子が置かれている状況や子どもの行動が何に向けて行われているのかを知ろうとすることが必要と思う。子どもの行動を自閉症であるからとった行動とするのではなく、さまざまな要因のなかでその子が選ばざるをえない状況のなかでとった行動であるとの考えに立つ時、そこにはどのような要因が作用しているのかを解きほぐし、選ばざるをえない子どもが置かれた状況を探ることが必要となる。

②子どもを見る時の大人自身のバイアス

本研究を通して私は普段あまり気にとめていない自分自身の思いについて考えてみることができた。そのなかで子どもを観察する際に私自身のバイアスとなっていたものをあげると次の3つがある。

1つ目は、子どもの世界で起こるコンフリクトのエピソードのなかで、コンフリクトを避けたいと思っていた私は、ネガティブな感情が「私」自身に生じるのを避けたいがためであった。また、コンフリクトが終息した状態こそが安心できるものという思いの深い部分にあったものは、子どもをコントロールすることができるという思いであった。そこには「主体性をもった子ども」ということは頭ではわかっているつもりでも、実践のなかでは私が考えるように子どもに動いてほしいということを強く期待する「私」がいた。このような「私」自身のことを意識化せず、子ども達のことを理解しようとしていた。

2つ目は、一連のエピソードをつないでいく時に気づいたことである。これらの出来事は、私が考察したストーリー以外の展開として子どもの生活の流れのなかで起きなかったとは言えない。日常の観察での出来事は一過性のものであり、ある視点に立って観察しそれをもとに解釈していくことは避けられないと思う。何の視点ももたず、ありのままの現実からその場で起きた意味をつかむということは、私にはできそうにない。「視点をもたない」という

ことができないのであれば、逆にそういったストーリーや頭に浮かぶいくつかの仮説を意識化し自覚していくことが確証バイアスに対して必要なのではないかと思う。

実践の場では、エピソードをつないでいく過程で自分の視点を自覚し、その視点をもとに作りあげつつあるエピソードのつながりと現実の子どもの姿を見比べ、仮説と現実の出来事とのズレから子どもにとっての状況や行動の意味に近づけていく。そのためにエピソードをつないでいくのである。

3つ目は、情報や知識をもとにして私がつくりあげた自閉症像に結びつけることによって、子どもの行動を理解しようとしていたことである。自閉症の観念像をもとに子どもを理解してかかわろうとしていた私は、自閉症がスペクトラムであり連続性があると言いつつも、実践の場ではどこかで自閉症と非自閉症の区切りをつけて支援を考えていた。このことに矛盾を感じつつ私は子どもを前にしていた。現実の生活では子どもはさまざまな要因のなかを生き、その要因の創発により結果として自閉症の行動特徴とされるものがあらわれると考えるなら、子どもがどのような状況の中を生活しているのかを知ることがまず必要となるだろう。

参考文献

- 大井学 (2004) : 高機能広汎性発達障害をもつ人のコミュニケーション支援～語用障害とその補償 : 障害者問題研究 32 (2) : p22～p30
- 大井学 (2006) : 高機能広汎性発達障害にもなる語用障害～特徴、背景、支援 : コミュニケーション障害学 23 (2) : p87～p104
- 大井学 (2010) : 高機能自閉症スペクトラム障害の語用障害への根本的対処法は現時点で存在しない～理論とエビデンスなき「コミュニケーション支援」を超え自閉症と共生する支援へ : アスペハート vol. 24 : p22～p28
- 佐藤良子 (2010) : 「療育プログラム」が自閉症児のわが子の「心を壊した」のではないかと : 子どものこころと脳の発達 vol. 1 NO. 1 : p45～p59
- 新版自閉症の謎を解き明かす : ウタ・フリス : 富田真紀、清水康夫、鈴木玲子訳 : 東京書籍 : 2009
- エピソード記述入門～実践と質的研究のために : 鯨岡峻 : 東京大学出版会 : 2005
- 子ども学序説 : 浜田寿美男 : 岩波書店 : 2009
- 教育という文化 : ブルーナー : 岡本夏木、池上貴美子、岡村佳子訳 : 岩波書店 : 1996
- 自閉症幼児の他者理解 : 別府哲 : ナカニシヤ出版 : 2001
- 自閉症～これまでの見解に異議あり : 村瀬学 : ちくま新書 : 2006
- 変光星～自閉の少女に見えていた世界 : 森口奈緒美 : 花風社 : 2004
- 心理学の哲学 : 渡辺恒夫、村田純一、高橋滯子編 : 北大路書房 : 2002